

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01400

研究課題名(和文)「知識」の再配置と実践-東北の巫者と寺院をめぐる-

研究課題名(英文) Relocation of Practices of Religious Knowledge in the Tohoku Region

研究代表者

山田 巖子 (YAMADA, ITSUKO)

弘前大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：20344583

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,200,000円

研究成果の概要(和文)：近代以降、巫者を包摂した寺院として一関市大乘寺とむつ市円通寺を調査地とし、大乘寺に関しては、儀礼に参加し、参加者から聞き書きを行った。円通寺に関しては、2015年に旧小川原湖民俗博物館で再発見された恐山関連資料をもとに、近世から現代までの変化を跡づけた。また、東北出身の若者における宗教的知識の断片である「俗信」の保有量について、社会学者と民俗学者、日本倫理思想史の研究者で、質問項目を作成し、他の地域出身の若者との知識量の差を明らかにする量的調査を実施した。調査成果は、論文集『東北における宗教的知識の再配置』として刊行予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

民間巫者の調査報告は、シャマニズム研究の文脈で豊富な蓄積があるが、寺院が近代以降、民間巫者を排除/または包摂してきたその論理については必ずしも明らかではなかった。今回の調査で、岩手県、青森県の民間巫者を包摂してきた寺院の活動を時代の変遷とともに明らかにした。

若者の「俗信」の量的調査については、「信仰」ではなく、「知識」「行為/不行為」に焦点を当てた質問項目を作成し、「信じていないが実践する宗教的・慣習的行為」を描き出しことに成功した。また、俗信の地域差については、東北地方の若者に特有の「俗信」があるというよりも、知識を持つ者が多い「俗信」の傾向には地域差があることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The research sites were Daijyo-ji Temple in Ichinoseki City and Entsu-ji Temple in Mutsu City which are temples that have been inclusive of shamans since the modern era. At Daijyo-ji Temple, we participated in the rituals and interviewed the participants. At Entsu-ji Temple, based on the Osorezan-related materials rediscovered at Ogawarako Folk Museum in 2015, we traced changes from the Edo period to the present. Also, to determine the amount of popular beliefs or fragments of religious knowledes held by young people from the Tohoku region, and to compare it with that of young people from other regions, a sociologist, a folklorist, and a researcher of the history of Japanese ethical thought developed a questionnaire. The findings will be published as a collection of essays, Relocation of Religious Knowledge in the Tohoku Region.

研究分野：民俗学

キーワード：民間巫者 知識の再配置 俗信 寺院 近代 恐山

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究では、岩手県、青森県の両県で、民間巫者と巫者信仰を包摂する寺院、それを支える地域の人々の共有する「知識」を動的に把握しようとするものである。その際に注目するのは、宗教者の実践的な「知識」と、もとなるテキスト、また宗教者同士のネットワーク、地域住民に広く共有されている「宗教的な知識、感覚、心性」である。

筆者は、東北のオシラ神を調査する中で、地域の住民が「知識」を共有することの意味を探ってきた(山田巖子「人形儀礼と語彙 津軽地方のオシラ神をめぐる」日本口承文芸学会編『口承文芸研究』第42号「シンポジウム ローカルなものの生き延び方 現代における人形儀礼の再文脈化」2019年3月)。その中で、「熱心な信仰者」の存在に注目してきた。青森県津軽地方では、夢による暗示や、心身の異常、違和感から「オシラサマをサンゾイタ(授かった)」と称して、新たにオシラ神を祭祀するに至る人々が存在する。その背景には、山野や海川では、山の神、竜神など、「小さな神々」を「授かるもの」とする民俗知識が広く共有されていること、また、夢による暗示や心身の違和感に対して敏感なものの中から、「熱心な信仰者」となり、カミサマと呼ばれる民間宗教者へと変貌してゆく場合があることを示した(山田巖子「夏泊半島における民間宗教者 移動と役割」諸岡道比古編『半島空間における民俗宗教の動態に関する調査研究』2006年 弘前大学人文学部)。さらに津軽地方では真言宗寺院久渡寺が、オシラ神を統括することで、オシラ神が地域住民に寺社信仰の枠組みで理解されていることも明らかにしてきた(山田巖子「津軽におけるオシラサマ信仰の展開 / The evolution of Oshirasama folk beliefs in Tsugaru region」ハンナ・ジョイ・サワダ、北原かな子編『日本語と英語で読む津軽学入門』(2008年 弘前大学出版会)。

宗教者の持つ「知識」の再配置については、弘前大学の民俗学専攻の学生であった葛西栄美子の論が示唆に富む。葛西は、大正5年生まれ曽祖母が、津軽地方の農家の主婦から、カミサマへと変貌してゆく過程を、信者によって書き残されたノート、託宣の録音、信者や家族、親族からの聞き取りなどで復元しようとした(葛西栄美子「民間宗教者の知識と実践 カミサマ系巫者とその周縁」東北民俗の会編・発行『東北民俗』50輯 2016年)。彼女の曽祖母は神道系の新宗教教団、神習教で加持祈禱の方法を会得する一方で、イタコの「オシラ祭文」を習って、それをアレンジしたものを祈禱の場で披露していた。また、弘前大学民俗学研究室で編纂した論文集『弘前大学民俗学論集』(2019年3月)に、葛西は、『東北民俗』に紙幅の関係で掲載されなかった曽祖母の託宣を記したノートを資料として紹介した(「青森県津軽地方における民間宗教者の知識と実践」)。その中で祈禱や託宣の中には、文化庁保護部編『無形の民俗文化財 記録第3集 巫女の習俗』(1986年 財団法人国土地理協会)に記載されているイタコの詞章に似たものがあることを示している。曽祖母は、津軽地方のイタコの巫業や、既存の祝詞や経典から学んだものをベースにして託宣を行っていたという。例えば、託宣の場で「津軽三十三観音」を詠みあげたが、一つ一つの霊場の合間に「西国三十三か所」の御詠歌に似たものが詠まれていた。これらは真言宗の寺院を介した巫者のネットワークを考慮に入れなければならないことを示している。

このような研究から、録音の翻字などで復元したテキストの作成は、もとのテキストとの関係を知り、民間巫者の実践を考える上で、重要な意味を持つと思うようになった。

一方、申請者は、2011年から2013年にかけて「基盤研究(C)民俗信仰の再文脈化をめぐるダイナミズム」(JSPS KAKENHI Grant Number23520974)で調査し、山田巖子編集、映像資料『オシラサマ信仰の「現在」』(2014年3月 弘前大学人文学部)で映像を収録した一関市の新宗教教団大和宗とその寺、大乘寺とは、関係を続けてきた。岩手県南地方の盲僧・巫女は江戸時代まで天台宗に属し、明治以降も天台宗支配下にあったが、日中戦争勃発後、宗教結社への取り締まりが強化され、1939年の「宗教団体法」によって宗教統制が強まると、巫者や盲僧は天台宗から除外されることになった。そのため、「天台大和宗」を結成し、成巫儀礼を経た巫者は、師匠が教団に進達し、平泉中尊寺を経て天台宗総本山に申請して本山から得度牒を得るシステムを構築した。しかし太平洋戦争後の混乱で得度牒を得られなくなり、1952年に宗教法人「大和宗」を結成して中尊寺との関係を断ち切ることとなった(文化庁保護部編『無形の民俗文化財 記録第1集 巫女の習俗』(1985年 財団法人国土地理協会)。

本研究では、この大和宗が、新たな宗教実践を行う際に、従来の何をもとに再編成していったのか、を明らかにしたいと考えている。戦後の新たな「生き残り戦略」、「知識のネットワーク」

について明らかにしたいと考えている。

また、オガミサマと呼ばれる盲目の巫女の「身体化された『知識』」についても新たな視点での調査が必要と考える。さらに、オガミサマとの交流から、オガミサマは修行に入るまでに、地域の子どもの生活経験があり、本人の知る宗教的知識は巫業とは関わらないものも少なくないことが明らかとなった。また、オガミサマの呪術、エナマジナイ（袍衣呪い）などのように、当のオガミサマとしては、実践経験は少ないものの、岩手県の産育習俗や俗信と合わせて考えると、その分布や伝播に新たな知見がもたらされるものもある。巫者の知識を信仰圏の知識の総体から位置付ける作業を行う。

2. 研究の目的

本研究は、東北の巫者が近代以降の新たな制度に対応してゆく過程で、在来の「知識」をどのように再配置し、地域住民とともに新たな宗教実践を再構築してきたのかを問うものである。そのプロセスを民俗学、文献学の立場から明らかにする。明治以降、東北における巫者信仰は、寺院との関わりの中で、あるときは包摂され、あるときは排除され、変容を余儀なくされてきた。包摂と排除の論理を寺院側からも探ってゆく。また、新たに構築されていった「宗教的知識」がどのような形で地域の若い世代に浸透しているのかを、社会学の量的な調査で明らかにしようとするものである。

3. 研究の方法

本研究では、巫者を包摂する岩手県一関市の大乘寺を中心に調査を進めていく。その際に、大乘寺と交流のあった青森県弘前市の久渡寺、下北半島恐山の円通寺についても調査を進める。円通寺については、長らく文書の不在が疑問視されてきたが、申請者は、2015年に廃館となった青森県三沢市にあった小川原湖民俗博物館の旧蔵資料の移設に関与した際に、地下の館長室から、恐山に関わる古文書を発見した。この文書は幕末から明治にかけて書かれたもので、初代館長中道等が集めたものと推測される。中道の『奥隅奇譚』（1929年 郷土研究社）に紹介されているものも含まれるが、大方は未発表のものであった。「宇曾利山由緒」「奥羽南部北郡田名部宇曾利山由緒書上」「恐山境内案内演説」「恐山祭禮定規」などの写本を確認している。この史料群は、青森県立郷土館に寄贈されたが、2015年10月から11月に弘前大学資料館で開催した「渋沢敬三と小川原湖民俗博物館展 青森県の民具研究の軌跡と意義」展で、借り受け、展示公開した。2019年9月に基盤研究（C）「地方における『民俗』思想の浸透と具現化 渋沢敬三影響下の地方民間博物館」(2017年度～2019年度 JSPS KAKENHI Grant Number17ko3268 研究代表 山田巖子)の調査で改めて県立郷土館を訪問し、現物を確認したところ、まだ、未整理の状態で収蔵されていた。これらの文書については、青森県立郷土館の学芸員小山隆秀氏と、青森県史民俗部会の部会長で、『青森県史 民俗篇 資料 下北』（2007年 青森県）の調査で、円通寺調査の経験もある研究分担者の小池淳一氏に、郷土館と協議しながら、翻刻、紹介、分析を行ってもらった計画であったが、小池氏から近世の恐山研究の第一人者である宮崎ふみ子氏を紹介していただき、宮崎氏から数々のご助言を賜ることができた。

最後に、「知識」の量的な調査の必要性について述べたい。筆者は2010年に久渡寺のオンラ講参加者を対象にアンケートをとったことがある。この時はサンプル数も少なく、その後の研究に活かしきれなかった。一方で、弘前大学で教鞭をとる間、学生たちが宗教的な知識をそれと意識しないまま保持しているさまを観察してきた。申請者は岩手、青森、東京、山梨、北海道で、非常勤講師や集中講義の経験があるが、青森県、岩手県出身の学生は、民俗学の授業のコメントペーパーに自身の生活の中で培ってきた知識を披露することが少なくなかった。このような経験から、宗教的な知識が日常化し、広く分布していることを可視化する術はないかと考えてきた。竹内郁郎・宇都宮京子編著『呪術意識と現代社会 東京二十三区民調査の社会的分析』（2010年 青弓社）は、示唆に富む研究であるが、東北にローカライズした量的な調査を、量的調査の経験が豊富で、東北地方の社会状況に詳しい研究分担者の社会学者羽淵一代氏と協働して行う予定である。東京都二十三区の調査にはない、ローカルなメディアの存在や、地域の歴史的経緯、ローカルな文脈の情報が豊富にあることが、新しい視座を拓くものと考えている。

4. 研究成果

恐山関連文書については、佐藤良宣・小山隆秀が翻刻作業を行い、「恐山史料の再発見」（『青森県立郷土館研究紀要 第46号』同館、pp95-138、2022年3月）を執筆した。また、研究協力

者の宮崎ふみ子が、この史料をもとに、近世期の恐山の地獄の変遷を執筆して、現在、準備中の本科研の論文集に掲載予定である。小山隆秀は、青森県立郷土館所蔵の近代以降の写真資料から、現代に至る恐山の変化を跡づけている。この成果も科研の論文集に掲載予定である。

原克明は「水族と環境をめぐる信仰史・点描 青森津軽地域の俗信伝承から」(小峯和明編『日本と東アジアの環境文学』、勉誠出版、pp.289-293、2023年7月)を発表し、文献調査によって津軽地方の「俗信」を跡づけた。羽淵一代は、「日本・世界の地方社会における調査と準備」(文貞實ほか編『社会にひらく社会調査入門』ミネルヴァ書房、2023年)において、地方社会における調査について執筆した。山田巖子・原克明・羽淵一代は、「大学生の『俗信』的知識と実践」(弘前大学人文社会科学部『人文社会科学論叢』第15号 pp.1-24 2023年8月)で、東北地方出身の大学生とそれ以外の出身の大学生を比較し、俗信の地域差を示した。この調査成果ではまだ分析に回していないデータが多く、今後、順次分析してゆく予定である。

また、関連業績として、五所川原市の昔話研究者佐々木達司氏の遺稿『青森県の俗信辞典』の出典を再調査し、山田巖子と小池淳一で補訂して、青森文芸協会から山田巖子・小池淳一補訂佐々木達司編『あおもり俗信辞典』(青森文芸出版 2022年7月)を刊行した。

本科研の成果は、『東北における宗教的知識の再配置』として弘前大学出版会から混交予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山田巖子	4. 巻 別冊
2. 論文標題 津軽の冬のくらしと火の民俗	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 民俗建築 誌上シンポジウム	6. 最初と最後の頁 9-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山田巖子
2. 発表標題 旧小川原湖民俗博物館の映像資料
3. 学会等名 第71回日本民俗学会例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小池淳一
2. 発表標題 昔話録音音源の処理と発信
3. 学会等名 日本口承文芸学会第80回例会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 山田巖子・羽淵一代・原克昭	4. 発行年 2022年
2. 出版社 弘前大学俗信研究会	5. 総ページ数 43
3. 書名 大学生の俗信と「知識」に関する調査 報告書	

1. 著者名 山田巖子・小池淳一補訂 佐々木達司編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 青森文芸出版	5. 総ページ数 251
3. 書名 あおもり俗信辞典	

1. 著者名 佐々木達司・山田巖子・小池淳一	4. 発行年 2021年
2. 出版社 人間文化研究機構広領域連携型機関研究プロジェクト	5. 総ページ数 233
3. 書名 青森県俗信辞典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小山 隆秀 (Oyama Takahide) (00898124)	弘前大学・大学院地域社会研究科・客員研究員 (11101)	
研究分担者	渡辺 麻里子 (Watanabe Mariko) (30431430)	大正大学・文学部・教授 (32635)	
研究分担者	小池 淳一 (Koike Jyunichi) (60241452)	国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・教授 (62501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	原 克昭 (Hara katsuaki) (70318723)	弘前大学・人文社会科学部・准教授 (11101)	
研究分担者	羽瀨 一代 (Habuti Ichiyo) (70333474)	弘前大学・人文社会科学部・教授 (11101)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	宮崎 ふみ子 (Miyazaki Humiko)		恵泉女子大学名誉教授
研究協力者	佐藤 良宜 (Satou Yoshinobu)		青森県立郷土館学芸員

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関